続 徒然つれづれ No. 299

安全地帯

桑野　巍

あれから60年が過ぎ去った。「あれから」とは言わずと知れた1945年８月の終戦の日のことだ。人間は神から忘れるという特効薬をもらっているというが、８月15日が近づくとどうしてもあの日のことを思い出す。戦中派だからだろうか。

今年はあれから60年、節目の年でマスメディアも戦後60年の大型企画を展開中だ。各紙とも戦中から戦後の日本の足跡を可能な限り記録に残し、次代に伝えようと努力しているように見受ける。しかし、戦争体験者は年々減少しているし、時代は大きく変わっているし、暗くて貧しい話が多いせいか、若い人たちは大見出しを見る程度で、本文をじっくり読もうとしない傾向と聞く。

だが戦争体験を持つ先輩記者たちは「少しでも戦争の惨めさを後世に伝えたい」としてペンをとっている。大正一ケタ生まれでポツダム中尉の大先輩（昭和20年８月、韓国釜山の高射砲連隊に所属）は「僕の目の前で起きた兵隊と現地住民の出来事や飲食物、衣類の状況、緊迫感などを子や孫に話すが、彼らはあまり興味がないようだ。聞いているのか聞いてないのか、残念だね」と述懐していたがこれも時の流れの仕業なのだろうか。だから「書き残すのは今しかない」として社友会報に書く気になったと“昔の現実”を長文にわたって掲載した。

もう一人の先輩記者はあの時、旧制高校の２年だったというが、学徒動員で下関の工場にいたそうだ。彼は「水っぽいカボチャを食べながら玉音放送を聞いた。僕は悲しかった。終戦を境に高校の寮の食事はイモからイモの茎に変わったんだ。僕にとって飢えの時代は長く続き“わが青春に食いなし”だった」と、半ば自虐的に綴っていた。

終戦記念日には全国戦没者追悼式典が東京で行われるが、今の若者に「今日は何の日か知っている？」と聞いても、実はピンとこない人が多いとも聞く。海外ではいまもどこかで戦火が燃えているが、それは遠い所での出来事で「日本には関係ない」が大勢だろう。日本の近代史はいつの間にか“古代史”になってしまったのだろうか。

もう一人の昭和一ケタ前半生まれの先輩記者は当時弱冠15歳、学業半ばで海軍少年兵を志願し、体力検査、学力テスト、適性検査を突破して合格、のちに海軍航空隊に入隊した。練習生として文字通り「月月火水木金金」の猛訓練に耐え、厚木航空隊基地に配属された。部隊は首都東京を護るという大任。しかし、帝都への空襲が激しくなると、襲来する米機を迎撃するため戦闘体制に入るが右往左往するだけで、反対に敵の戦闘機から機銃掃射を受ける。だから機銃掃射で痛めつけられた滑走路の銃弾拾いや修復に従事するだけ。それにしても戦争は恐ろしかったという。

先輩たちの戦争体験のごく一部を紹介したが、いまは平和な時代、空襲、灯火管制、勤労奉仕、学徒動員、銃後の守りなどの言葉は幸いにして死語になっている。概ね70歳以上の人たちはこの忌まわしい言葉を知っているが今は忘却の彼方へ行ってしまったのだろう。

私はというと、当時小学校６年生、岡山県西部の田舎町で荒れ地を開墾、イモやカボチャを作り、校庭の片隅や自宅裏の丘地で防空壕を掘っていた。そんな中、田舎といえども水島工業地帯が近いこともあってＢ29爆撃機が飛行機雲を残しながら飛来していたことをはっきり覚えている。大人の間では「水島が爆撃された。高射砲で迎撃したらしいが戦果なし。これじゃあ日本は危ない」という会話。この会話が耳に入り、私は「学校の先生は神風が吹く、日本は絶対に勝つといっとる」と反発したことも記憶している。

実をいうと、自分は弱虫で戦争体験を思い出したくない派だ。人間を惨めにするからだ。また、戦争、革命、宗教民族紛争など難しい問題は軽々に論じるべきではないという“逃げの姿勢”も強い。それでも過去の戦争については誰かが語り継ぐ必要はあるし、二度と戦争を起こしたり、巻き込まれてはならないという気持ちは人一倍強い。

そしてこの臆病者は絶えず平和な世の中を求め「いつまでも安全地帯で暮らしたい」と願っている。

（自治大阪編集委員会顧問
時事通信社元大阪支社長）